

「九つには その心念々に五塵六欲は外の樂にして、けだし微なり、三禪の樂は石泉の如く、その樂内に重しとおもうは、此れ梵心を發して色無色の道を行ずるなり。」

無色界は欲界、色界の上に位置する上位の世界。

欲界は欲望の世界

色界は欲望希薄な存在の世界

無色界は一種の精神だけの世界

具体的には瞑想の究極の世界 サマージの世界。

ひたすら禪定樂にひたる。

ですが天台宗の考えでは無色界とは言え物質がないわけでもない。

なぜなら色心不二なので厳密に心だけの衆生はいないと考えます。

法華經方便品第二の末尾にある「十如是」の考えですべての衆生には「如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等」が伴う。如是は真如に即した衆生の十の性格。

すがた、性格、かたち、能力、そのなすところ、きたるべき因 きたるべき縁 来るべき結果 来るべき次の展開 それらすべてが最初から終わりまで実相真如を離れていない。

前五つはそのもの性質を語り、のちの五つは時間軸での存在を語る十如是。

この中の「如是体」があるので体のないものは衆生はないと考える。

無色界は非想非非想処・無所有処・識無辺処・空無辺処の4つの分けがあります。

非想非非想処。思うでも思わないでもない世界。

無色界の衆生は常に瞑想状態で三昧に入ったままです。

でもそれでは大乘仏教の見方では一種の現実世界からの逃避行でしかない。

なお、誤解しやすいが厳密にはここは天界ではない。

なので「無色界天」という言い方はしない。

天界は「色界天」まででその一番上を色苦境天とか有頂天という。

大自在天 シヴァ大神の住む世界です。

ようするに場所としては存在しない世界。

天台では天部のうち大黒天を大事にしますが、これはひとつには大黒天はもともとシヴァの憤怒相で最も高い天界に住む上界天だからです。

この無色界は瞑想に入ったままを望む修行者の世界です。

まあ、リシと言われる大仙人などの境涯ですね。

常に三昧にいる。

いいようだがいいとしない。 かつ深い禪定に浸って楽しむ快樂主義でもある。

快樂主義でもいいがやることがある場合は困るね。

お釈迦様も瞑想によって無色界の境涯にもいかれたが。 もっと現実に即した境涯で悟られたという。

そうでないと現実世界の救済はできない。

大乘仏教では自分が悟りや三昧に入ればそれで終わりではないと考えるからです。

「発心」

「発心」を辞典で引くと、まず「思いたつこと」とあり、次に「出家して仏門に入る」、さらに「菩提心を起こすこと」とあります。

このなかで最後の定義が、この言葉の本来の意味であることは言うまでもありません。菩提とはサンスクリット語の bodhi (ボーディ) の音写で、「悟り」を意味します。よって「菩提心を起こすこと」とは、「悟りを求める心を起こすこと」なのです。大乘仏教では仏の完全な悟りを求めて修行するものを菩薩といますが、発心すること — つまり悟りを求める心を起こすこと —こそ、菩薩の修行の第一歩と位置付けられているのです。

では菩提心とはどのような心でしょうか。中国天台宗の智顛は、『摩訶止観』のなかで、菩提心を起こすことは具体的には四弘誓願を起こすことであると述べています。四弘誓願とはすべての菩薩に共通する願いのことですが、それらは(一)衆生無辺誓願度(この世に生を享(う)けたものは数限りなくいるが、一人残らず救うことを誓う)、(二)煩惱無量誓願断(煩惱は無数にあるけれども、必ずそのすべてを断ち切ることを誓う)、(三)法門無尽誓願知(仏の教えは果てしなく深く広いが、必ずそのすべてを知ることを誓う)、(四)無上仏道誓願成(この上ない悟りに必ず到達することを誓う)というものです。

当然、菩薩は仏の教えを学び、煩惱を断じて悟りを得ようと修行に励みます。しかし、菩薩の修行にはもうひとつ大きな特徴があります。それは自分だけが悟りを得ればよいとは考えず、すべての人々が悟りを得るまで自分も悟りを得ず修行を続けると誓うことです。その意味で四弘誓願の中で、最初の誓願が最も重要なものになるのです。言い換えると、すべての人々が悟りに到るまで共に歩み続けるという決意が、菩薩の発心の中核なのです。

最近是人々の絆が希薄になり、孤独死などが増加して大きな社会問題となっています。このような時代にこそ、菩薩の発心に象徴されるような、すべての人々と歩みを共にしてゆく姿勢が求められているのではないのでしょうか。